

# 第 1 回 雄物川上流河川環境検討会(議事概要)

- 日 時:平成 26 年 9 月 6 日(土)、13 時 00 分～15 時 30 分
- 会 場:大曲職業訓練センター
- 出席委員:青谷委員、沖田委員、佐藤委員、杉山委員、渡部委員
- 事務局:湯沢河川国道事務所  
平野所長、佐藤副所長、畑山課長、杉田専門職

## <議事概要・意見>

(発言者:赤字 検討委員、青字 事務局)

### 1.設立趣旨について

- ワンド・たまりという言葉の使い方を明確にすべきである。(委員)

### 2.検討会規約について

- ご意見を受けて、本検討会では、重要種の位置情報等、公開が適切でないものについては非公開とするが、基本的には公開することに変更する。(事務局)

### 3.自然再生計画について

- 自然再生とは、悪化した環境を昔の状態に戻すことを計画するのか、あるいは、今良好な環境が存在する箇所を保全することを計画するのか、いずれの切り口で検討するのか？(委員)  
→両方の切り口があるかと思うので、御議論いただきたい。(事務局)
- また、雄物川の自然再生事業とした場合、湯沢河国の管内だけが対象なのか、あるいは、下流側の秋田河国側も含むのか？(委員)  
→本日がスタートであり、湯沢河国で事務局としているが、再生事業を進める場所が秋田河国管内となれば、いずれ秋田河国側も含めることを検討する。(事務局)
- 昔に戻すための「再生」ではなく、本検討会で課題をあぶり出し、より良い環境としていくための方法を検討していく。自然再生の目的をはっきりさせていくことが必要である。(事務局)
- 再生事業として礫河原を復元する、湿地を再生することが目的ではない。何のためにそれらの取組を行う必要があるのかを考えることが重要である。(委員)
- 自然再生計画で位置づける「地域等との連携・協働」というのが最も重要である。(委員)
- 検討を進めていくにあたり、データ量が多すぎるため、扱うデータについても必要なものを抽出する必要がある。保全するのか、戻すのか、どのような方向性で検討を進めるのか、落とし所をはっきりとさせた方が、検討の方向性や場所の絞込みもしやすい。(委員)

### 4.環境上の現状と課題について

#### (水生生物・物理環境)

- (他河川と比較し)湧水が河川敷にあるというのは、雄物川の特徴的な部分といえると思う。「湧水生態系としての雄物川」というのが指針の一つとなるのではないか。(委員)
- ゼニタナゴに関しては、現状が把握されていないため、再生計画を検討する上でも現況把握が必要である。産卵期を迎える調査適期の今、大至急調査を実施すべきである。(委員)

員)

- 昔は、役内川にもサクラマスが遡上していたが、最近は見なくなった。自然再生事業は一般の人と関わる事業であるため、レッドデータブックに記載されている種だけではなく、サケ、マス、あるいはカジカなど地元の方に関わりの大きい種についても産卵場や生息・繁殖状況の確認ができないか検討して欲しい。(委員)
- 湧水が一時的に消失しても底生動物は重要種も含め一定期間生息するが、魚はすぐに影響を受ける。このため、魚類を指標に試みていくことで良いと思う。(委員)

(鳥類)

- 鳥類では、イカルチドリは分布が限られ県内全体では数が少ない。コチドリは普通種で水辺全域で良く見られるため、ここで取り上げなくても良い。コアジサシについてはかつて、[ ]に営巣地があったのが(H13～15 頃)、樹林化により営巣に適さなくなっている。コアジサシの現状が分かっていないため、コアジサシについて注目して欲しい。(委員)
- カワウも確かに近年目撃情報が増えている。県北地域には大きな集団営巣地が確認されているが、この地域では、これまでのところ集団営巣地は確認されていない。集団営巣地が出来てしまうと、巣を撤去しても営巣を継続するため、集団営巣地ができないように樹林化しない方向の取組みや、河畔林を適切に管理する取組みが必要となる。(委員)
  - 資料にはないが、河川環境を指標する種で気になる種がヤマセミである。土壁に横穴を掘って営巣するため、砂礫の崖地がないと繁殖できない。雄物川上流部の山と川が接しているような地形が適地と思われるが、植生が繁茂する、あるいは樹林化するとヤマセミが営巣できる環境が減少してしまい気になる場所である。(委員)
- 鳥類は、繁殖地、越冬地として水辺を利用する。確認するには調査の季節が重要になる。(委員)

(植物)

- 植物・鳥類の秋田県レッドリストの改訂版が先日出ており、最新版で評価するよう気を付けて欲しい。(委員)

(今後の調査計画)

- 湧水の起源や、湧水によりどのような環境が形成されているかの把握等、調査すべき項目はたくさんある。(委員)
- 31 か所のワンド調査は、1 回あたり 1 時間程度の時間で行うピンポイントの調査である。むしろ、重要なワンドには時間をかける等、調査に軽重を付けることが重要だと考えるので、10 箇所程度に絞って回数多くモニタリングしていくことも必要ではないか。(委員)
- 環境 DNA に関しては、シークエンスがたくさん出てしまい、基本となる情報がほとんどない状態だと思うので、まだ難しいのではないか。(委員)

## 5.検討会資料について

- 資料-5 の P19 にコアジサシの [ ] とあるが、このデータについて把握していないため、詳細な内容を教えて欲しい。(委員)

## 6.サクラマスについて

- サクラマスは、桜が咲く頃に遡上するため、そのような名前がついている。春に川に入ると半年間餌を食べない。夏場気温、水温が高くなると淵で越夏する。その際、河川に湧水があると水温が高くないためサクラマスにとって良好な環境となる。秋の9月下旬から10月中旬にかけてサクラマスは産卵する。参考までに、サケはサクラマスより少し産卵時期が遅く10月～12月頃である。産卵場所は、サケは大曲付近に多いが、サクラマスはさらに上流の沢の方で産卵する。ただし、今はどうなっているかデータはない。サクラマスの産卵場調査を行うならこれも今の時期である。(委員)
- 産卵場を確認した場合でも、なぜ、そこに産卵するのか考察することが重要である。(委員)

## 7.総括

- 自然再生計画は下流も含めて検討するが、雄物川の特徴であるワンド・たまりや湧水環境に着目すると、上流域での検討となってしまうのは必然的である。(委員)
- 今回の検討会で、ある程度「ワンド・たまり」を再生計画の主たるものとして絞りこめたので、第2回以降もこれを基に検討を進めていく方向で良いのではないかと。(委員)

以上